

## 1 大きな渦の中で

プールのなかでたくさんの人が泳いだり、遊んだりしている。プールの水はさざ波をたて、午後の光を乱反射させている。プールにいた子どもたちが、遊びながらゆつくりと右回りに歩きはじめる。彼らは水をかきわけながら、右回りに移動してゆく。それにつられて、ほかの子どもたちもまた同じ方向に回りはじめる。彼らの動きにあわせて、プールの水もゆつくりと同じ方向にうねりはじめる。水の中に立っていた人たちも、プールのなかでできたうねりに押されるようにして、同じ方向へと歩き出す。そうやって、水に入っていたすべての人々が、身体を浮かせて水の流れに身をまかせたり、あるいはみずから進んで水の流れに沿って歩いて、プールの渦を加速させようとする。

最初はゆるやかだった水の回転は、やがて、はつきりと目に見える大きな渦を形成する。子どもたちは渦に流されながら歓喜の声を上げ、大人たちもまた身体を流されていく気持ちよさに笑みを漏らしている。プールの隅の手すりにつかまって、様子をながめている人もいる。

そうやっているうちに、渦の回転がだんだんはげしくなってくる。人々は、流れに逆らって泳ぐことができなくなる。子どもた

ちの上げる声もまた、歓喜の声から、すこし恐怖をおびたものへと変わってくる。渦の流れが力強くなって、気がついたら、渦から外へ逃れられなくなっているのだ。何人かは、渦から逃れようとして岸のほうに向かって泳ぐのだが、流れに押し戻されて、ふたたび渦のなかへと飲み込まれてしまう。渦から逃れようと試みる人たちの表情は、歓喜から恐怖へ、そして絶望へと変わっていく。もうここから逃れることができない状態になっている。どうしてだろう。なぜこういうふうになってしまったのだろう。

渦に飲み込まれながら、まわりの人たちを見る。逃れようとして必死でもがいている人たちがいる。おぼれそうになって恐怖で顔を引きつらせている子どもがいる。ただやみくもに手足をばたばた動かしている人がいる。しかし、そういう人たちは少数派なのだ。ほとんどの人は、すぐ近くにおぼれそうな人がいるにもかかわらず、依然として楽しそうに流れに身をまかせて渦に浮かんでいるのだ。渦の流れに浮かんだり沈んだりしながら、幸福そうに目を閉じ、ほほえみに似た表情をして水の表面をただよっている。うっとりとして目を閉じて、流れのままにたゆたう人々。彼らは何が起きているのか気づいていないのだろうか。おぼれる人たちに手をさしのべようとすらしめない。

強い渦の力に飲み込まれて、もがいている人たちがいる。彼ら

はそこから脱出しようと思毛の努力をつづける。波のなかで沈みそうになりながら、何度も手を上にさしのべ、何もない空間を必死でまさぐっている。そうやっているうちに、ある者は渦の勢いに吹き飛ばされてプールの壁にはげしく衝突して意識を失い、ある者は水の中に飲み込まれてもう一度と浮かび上がったはこない。プールの隅で手すりにつかまっている人たちは、渦の勢いに飲み込まれまいと力をふりしぼり、なんとかいまの態勢をたもとうとしている。

私は渦のなかでもがきながら、その外に出ようとする。両手をかき回して、渦の外へ外へと身を乗り出そうとする。しかし、いくらがんばっても、渦の力にからめとられて、ふたたび流れの中心部分へと戻ってしまうのだ。外に出ようとして、戻される。出ようとして、また戻される。このような不毛な努力を続けているうちに、ふっと、身体中の力が抜けていく。ああ、このまま渦の流れに身をまかせてしまえば、どんなに楽だろうか。流れに逆らわずに、身体のバランスを取りながら、目を閉じて水の表面に浮かんでいればどんなに心地よいことだろう。目を開けて、まわりを見渡してみる。幸せそうに浮かんで流れているたくさんの人々。彼らはおぼれることもないし、身を危険にさらすこともない。流れに身をゆだねながら、幸せそうにほほえんでいる。

(書籍版に続く・・・)